

続、今なぜ「CLP」か

「友」地区委員 前 岡 志 郎 (P.8~9)

ロータリーの本質を問う理論や奉仕ではなく、組織変更の方法論です。

ロータリーには「指名されたら断るな」という暗黙の了解があります。反面ロータリーの活動計画はレストランのメニューのようなもので、無計画に全部を食べれば必ず健康を害します。自分の体調や懐具合に合わせて、自分に適した料理を選ぶべきと云う考え方が所謂「ロータリーメニュー論」です。CLPは何れかと云えば後者に属します。美食家でも粗食家でも一流のメニューを良く見れば自分に適した皿がある筈です。10人のクラブでも400人のクラブでも好意的に薦められたメニューの中に自分が欲しい料理があれば食べてみればよいではありませんか。このように理論や勉強ではなく推奨事項の助言には、専門の委員会があった方が良くと考えて今年度「CLP検討委員会」を設置しました。

最近「4大奉仕」とは何ですかと質問されました。「ポールハリス」の名を知らない会員もいます。これは本人の資質ではなく教えない私共の方が問題なのです。現状を知らない方に現状の変更を説いても無意味です。ロータリーの本質を学ぶ手段と態勢作りが今最も大切な地区の責務で、PETSや地区協議会も形式の選択が目的ではなく勉強会です。

これらには自主性と云う選択の自由がありますが、全員が必ず守らねばならないルールもあります。ロータリーの原則は7月1日に始まり翌年6月末に終わります。これを単年度責任と申します。この期間内で定款細則や地区やクラブの予算や約束事の範囲内で責任が遂行されます。決して他年度や他地区や他クラブや他委員会に干渉してはならないのです。全ての会合には目的があり、全ての役職には与えられた任務と権限があるからです。最初にそのことの指導が幹部研修の第1歩です。自分を守るには他を守ると云う大原則の上でCLP等の形式論が成立し、新しい年度が新しい考えで進むのは素晴らしいと思います。

全ては知ることから始まります。判断や対応は金太郎飴ではありません。

今世界で最も顕著な出来事は「多様化」が急速に進んでいることだと現職の理事から聞きました。地区もクラブも夫々の特性を尊重する多様性の時代になったのです。視点を変え視野を拡げて柔軟に自分を高める努力をしなければ対応出来ません。CLPやDLPなど新しい制度や規則には必ず表と裏があります。その負の部分のカバーする仕事が研修なのです。優秀な人材を探して入会させた時代から、入会させてから優秀な人材に育てる時代に変わり教育制度が急に脚光を浴びてきました。今迄地区になかった研修委員会を私の助言で設置して超ベテランにお願いしました。側面からガバナーの方針に協力する地味な仕事ですが、マンネリやセクショナリズムを打破する一助になれると信じます。

職業奉仕安楽死説や、4大奉仕の行く末も合わせて考えましょう。

日本を代表する論客佐藤千寿さんの「職業奉仕は安楽死の運命」説は「友」にも一部紹介されましたが、極く最近まで4大奉仕を5か6大奉仕にと検討されていたのが、CLPでは一気に小委員会に格下げされています。4大奉仕が既に時代に合わない位、変化したことも事実ですが、それを一般会員が理解出来ているでしょうか。6大委員会の構成でも左半分の3委員会は従来のクラブ奉仕で、右の2委員会は寄付の窓口で、奉仕プロジェクト委員会に従来の社会、新世代の両大奉仕がありません。これらは抜本的な大改革です。委員会の数もCLP案では大6小27で計33委員会です。副委員長を含めて39名、小委員各2名で54名、会長幹事会計SAAなどの理事役員を考えれば100名です。

CLPの経過と現状、「友」平成18年10月号 重田政信RI理事の論文をご参照下さい。

2004年11月RI理事会で正式承認。推奨細則を改正し、4大奉仕を標準RC定款に採用を決定。昨年8月の調査では日本34地区中14地区が推奨支援を決めた。先行概念DLPの採用は1996年承認され、2002年に強制適用されたが、CLPはクラブの自主性でRIは強制すべきでないと言われた。弱小クラブの強化でスタートしたが、今は大クラブにも適用を対象としている。又ロータリー先進国中心の会員減少を、固定概念や4大奉仕中心の形骸化打開策等で、各奉仕間の垣根を取り除き地域や世界のニーズに応える効果もあるが、大局はWCSの重要性が益々拡がっている現状です。